2013 年度　国際ユース作文コンテスト受賞者

参加国数：157 カ国
応募総数：15,105 作品（子どもの部 4,522 作品、若者の部 10,583 作品）

文部科学大臣賞（最優秀賞）（各 1 点）

＜子どもの部＞

- 『ガーナの人々のちえ』
  丹 幹哉（日本＜ガーナ在住＞）9 歳

＜若者の部＞

- 『私の心の中の悪魔が消えた』
  ロジャース・キムリ（ルワンダ）24 歳

優秀賞（各 2 点）

＜子どもの部＞

- 『希望の光』
  キーアン・チャン
  （カナダ＆台湾＜台湾在住＞）12 歳
- 『すべての人のための道』
  川田　遥（千葉県／市川中学校）14 歳

＜若者の部＞

- 『境界線を越えて』
  シディク・マウラナ（インドネシア）24 歳
- 『個人と文化の関係』
  ヌラナ・ラジャボバ・オクタイ
  （アゼルバイジャン）24 歳

入選（各 5 点）

＜子どもの部＞

- アナスタシア・レベデンコ（ウクライナ）10 歳
- アンヘル・マオンリ・カバリェロ・オルテガ
  （メキシコ）11 歳
- シャー＝ミール・アイザズ（パキスタン）13 歳
- 末満 樹林（東京都）14 歳
- 中森 美希（千葉県）15 歳

＜若者の部＞

- 木田 夕菜（鹿児島県）16 歳
- 佐藤 夏佳（東京都）16 歳
- シンバラシェ・カネウンイェンイェ
  （ジンバブエ）16 歳
- デムチャック・オリハ（ウクライナ）17 歳
- ヒメナ・クルベロ・サバラ（ウルグアイ）20 歳

佳作（各 25 点）

＜子どもの部＞

- 菅野 貴子（北海道）10 歳
- ティタレー・トゥマルクサメ（タイ）10 歳
- ヤン・ジシ（中国）10 歳
- エクラー＝ザボー・ボトンド・アレクサンダー
  （ハンガリー）11 歳
- 加藤 慈弥
  （日本＆チベット＜ネパール在住＞）11 歳
- キラ・ハウスホルダー（米国）11 歳
- パク・アイヤ（カザフスタン）11 歳

＜若者の部＞

- 宇佐美　賢志（日本＜英国在住＞）15 歳
- シュブハム・クマール（インド）15 歳
- リサ・チェン（米国）15 歳
- オーロナ・シャルカル（バングラデシュ）16 歳
- ネハ・アナ・ドゥサ（インド）16 歳
- 山口　夏紀（茨城県）16 歳
- 島田 千秋（東京都）17 歳
- オ・ダヒョン（韓国）17 歳
- 長谷川 ゆり（埼玉県）17 歳

- 太田 のどか（長野県）12 歳
- 塩畑 奈菜（東京都）12 歳
- 竹田 時音（京都府）12 歳
- タビサ・ミラー（オーストラリア）12 歳
- 丹 由美子（日本＜ガーナ在住＞）12 歳
- 木寺 沙紀子（福岡県）13 歳
- 立川 凛花（神奈川県）13 歳
- ブレント・リン（米国＆台湾＜台湾在住＞）13 歳
- 武藤 杏実（東京都）13 歳
- アドリアン・エシュテハーディアン（英国＜スウェーデン在住＞）14 歳
- アレクシン・C・ヤップ（フィリピン＜ベトナム在住＞）14 歳
- 澤野 仁見（東京都）14 歳
- 清水 海玖（千葉県）14 歳
- ジュヒ・サクセーナ（米国）14 歳
- ティジャナ・ドドフ（マケドニア）14 歳
- トゥウィンクル・シャルマ（インド）14 歳
- ハワ・ルーファ（モルジブ）14 歳
- 岸本 啓子（新潟県）15 歳
- 廣澤 可南子（愛知県）17 歳
- ロリーン・ドミニケ・B・パトロン（フィリピン）17 歳
- イエバ・キッラ（ラトビア）18 歳
- フランジスカ・ハートマン（ドイツ）18 歳
- グボーグラ・フェリックス・コルク・フェイト（ガーナ）19 歳
- アリーナ・トポラス（ルーマニア）20 歳
- オクタビオ・ダニエル・カレーニョ・ゴメス（メキシコ）20 歳
- アルバロ・サンティアゴ・コンド・カラバージョ（エクアドル）21 歳
- シルビオ・ゴドイ・アルギス（アルゼンチン）21 歳
- ビクトリオ・ロマン・クジェール・ゴメス（パラグアイ）21 歳
- マハマット・アテイブ・ダハブ（セネガル）21 歳
- ルナ・トピエー＝ルタジュ（フランス＜米国在住＞）21 歳
- ツァン・マン・イン（中国）24 歳
- ディアナ・マルセラ・サラスティ・レアルペ（コロンビア）24 歳
- ルスベイ・メンデス・サンティス（メキシコ）24 歳
- アブドゥルカベール・イショラ（ナイジェリア）25 歳

学校特別賞（2 校）

- 市川中学校・市川高等学校（千葉県）
- 東京学芸大学附属国際中等教育学校（東京都）

学校奨励賞（27 校）

- アクラ日本語補習授業校（ガーナ・アクラ市）
- 郁文館グローバル高等学校（東京都）
- オシュワル・アカデミー・ナイロビ・プライマリー（ケニア・ナイロビ市）
- 京都学園中学高等学校（京都府）
- 国士舘中学校（東京都）
- 照曜館中学校（福岡県）
- 跡見学園中学校高等学校（東京都）
- 大田区立大森第六中学校（東京都）
- 近畿大学附属和歌山中学校（和歌山県）
- こくご塾 KURU（東京都）
- シカゴ補習授業校（米国イリノイ州）
- 昭和女子大学附属昭和中学校・昭和高等学校（東京都）

- 洗足学園中学高等学校（神奈川県）
- 高輪中学校（東京都）
- チューリッヒ日本人学校日本語補習校（スイス・チューリッヒ市）
- トリド日本人補習校（米国オハイオ州）
- バンクーバー補習授業校（カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州）
- 北海道帯広三条高等学校（北海道）
- 松本秀峰中等教育学校（長野県）
- 柳井学園高等学校（山口県）
- セント・メリーズ・インターナショナル・スクール（東京都）
- 中部テネシー日本語補習校（米国テネシー州）
- 東京賢治シュタイナー学校（東京都）
- 東大阪市立花園中学校（大阪府）
- 不二聖心女子学院（静岡県）
- バンクーバー補習授業校（カナダ・ブリティッシュ・コロンビア州）
- 宮城県迫桜高等学校（宮城県）

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

ガーナの人々のちえ

（原文）

丹 幹哉（9 歳）
日本＜ガーナ在住＞
アクラ日本語補習授業校

「きっと電気は来るよ。大じょうぶだよ」と言って、てい電中の中、みんなひたすら電気が来るのを待つ。へやにはろうそくをつけて、歩く時だけ、かい中電灯を使う。宿題もできない。テレビも見られない。ガーナではこんな時、ただみんなでひたすら電気が来るのをじっと待っている。

でも、電気は本当に来るんだ。待っていれば、必ず来るんだ。ガーナ人のうちのお父さんたちは、けっしてあわてない。でも、お母さんはいつもてい電がくると「ちょっとメーターを見てきて」とか、「いつになったら、電気が来るのかしら」と言ってあわてる。

ぼくも小さいころは、お母さんといっしょに、てい電になると、いやな気分になっていた。けれども、今はわかっているんだ。電気は必ず来るっていうことを。

ガーナでは、毎年 1 月から 3 月にかけては、高温で日照りの日が続く。それからハマターンがやって来る。すなあらしがふって、月が赤色に見える。太陽は、まるで月みたいに見える。ぼくののどがいたくなって、みんなもせきをし始める。はだは、かんそうして白くなる。ぼくは、ハマターンの時期がきらいだ。なぜなら、みんな病気になってしまうからだ。

でも、ガーナの人たちは知っているんだ。ハマターンには、終わりがあって、必ずめぐみの雨がふり、その後、雨季がやってくることを。雨季になれば水も来る。バケツ 1 ぱいで、体中をあらわなくてもいい。ぼくは雨季のかみなりやあらしみたいな大雨はきらいだけど、水がいっぱい来るから、雨季は大好きだ。

ガーナの人たちは、てい電になっても、だん水になっても、神さまが必ず、水も電気もあたえてくれると信じている。だから、けっしてあわてない。おいのりをして、回ふくをしずかに待っている。ぼくは、これはガーナの人たちが、きびしい自ぜんの中で、生きるために身につけた、ちえなのだと思う。

ぼくは、毎年夏に、おばあちゃんのいる日本へ行く。てい電になんてなることもないし、水もいつもたっぷりある。だから、お母さんは、水や電気が来ない時、少しも待てないんだ。

ぼくは、待てる人になりたいと思う。あわてたってしかたがない。どんなに日照りの日が続いても、必ず雨がふるはずだ。そうやって、ガーナの人たちは、きびしい自ぜんと向かい合ってきた。だから、パイナップルやプランテーンなどのたべものがたくさんできると、みんなで分け合うんだ。

ぼくは、ガーナの人たちが、自ぜんと向き合うことができること、そして、たくさんあるものを分け合うことができることは、ガーナの人たちのすばらしい文化なのだと思う。自ぜんとうまくつき合って、あるものをみんなで分け合って、人を大切にすること、それがよりよい未来を作る力なのだと思う。

ガーナの人たちの生きる力はすごい。どんなきびしい自ぜんでも、それにさからわずに、うけいれる。そして、神様がきっと助けてくれると信じてまつ。このように、大きな心を持つことで、前向きに考えることができる。そこでは、みんなで分け合って、助け合うので、平和な世界をきずくことができると思う。

待つことのできなかったぼくも、お母さんも、ガーナの人たちの前向きな生きる力から、学ぶことがたくさんあると思う。日本では、いろいろなことがものすごいスピードですすむ。だから、そのスピードが落ちた時、ぼくたちは不安になる。でも、何も心配することはないんだ。雨は必ずやってくるし、水も電気も同じだ。

信じて待つこと、みんなで分け合うこと、そうすれば、必ず平和な未来がやって来るということを、ガーナの人たちがぼくに教えてくれた。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】 文部科学大臣賞（最優秀賞）

私の心の中の悪魔が消えた

（原文は英語）

ロジャース・キムリ（24 歳）
ルワンダ・キガリ市
農業畜産高等研究所

1959 年以来、私の国ルワンダでは、すべての人々がジェノサイド（大量虐殺）のイデオロギーに影響を受けました。それは国民の心を蝕み、1994 年には 100 万人以上もの罪のないツチ族を殺害するという残虐非道な行為へ人々を駆り立てました。これにより国の政治、社会、経済は不安定となり、混乱することになりました。

1962 年、私の母がまだ 1 歳だった頃、母の家族は祖国を脱出しました。その時、祖母は、ジェノサイドの加害者たちによって体中に怪我を負っていました。脱出先は祖国の北にあるウガンダで、そこに家族は落ち着き、長い間暮らすことになりました。母と父は、ウガンダで難民として厳しい暮らしを送る中で出会い、新しい生活を始めることを誓いました。二人とも大勢の家族を失っていたので、せめて自分たちは新しい家族を持ちたいと考えたのです。そして、1989 年に私はウガンダで生まれました。

私は自分が暮らしている国が祖国でないことを知っていましたが、やがて何が起きたのか、なぜ自分は祖国で生まれなかったのかについて、真実を知るようになりました。祖国に帰らないのはなぜなのか両親に聞いたのですが、答えは大体、祖国には自分たちを憎む人が大勢いて、ツチ族の人間など見たくないと考えているから帰国はできないというものでした。私たちツチ族はヘビと呼ばれ、時にはゴキブリ呼ばわりされることもあるのだと。また、祖国は水がいっぱいに入ったコップのようなもので、それ以上、水を注ぎ足すことはできないのだとも言っていました。

こうして、何か褒美をくれるためではなく、殺すために私を探している集団がいることを知りました。私は悪意を持つようになり、たっぷり復讐できる環境が整うのを待つようになりました。

しかし、1994 年から 2000 年の間に、祖国では、ルワンダ愛国戦線がフツ族政府を倒し、12 万人を超えるジェノサイドの加害者を投獄しました。加害者たちは、当時まだ裁判を受けていませんでした。裁判をするには、政府に巨額の費用が必要でした。商業施設を再建する代わりに刑務所を増やす必要もありました。

2001 年、ルワンダ政府はガチャチャ法廷を設けました。この法廷は、誠実さを基準に地域の人々から選出された「イニャンガムガヨ」として知られる、尊敬される長老たちが執り行います。「ガチャチャ」とは、ルワンダの公用語「キニャルワンダ（ルワンダ語）」で「短くきれいに刈り込まれた芝生」を意味する「ウムチャチャ」から生まれた言葉で、裁判を執り行う長老たちが座る場所を象徴しています。ガチャチャ法廷は、伝統と文化に根差したコミュニティの司法制度であり、真実、正義、和解を達成する目的で刑事裁判を中心に扱い、裁判の一部は被害者の手に委ねられます。

ガチャチャ法廷は、ルワンダ国民の統一と和解を主な目標にしていますが、それでも罪を許すように気持ちを切り替えることは、私にとってとても難しいことでした。でも、両親と兄弟 2 人と姉妹 3 人を殺され、その死を目の当たりにした私の親友が、2004 年にガチャチャ法廷で犯人の男を許してから、私の気持ちは変わりました。

私は、復讐ばかり考えるのではなく、自分自身の成長と祖国の発展に目を向けるよう気持ちを切り替えたのです。2005 年、16 歳だった私は、家族を殺害した犯人全員を親友と同じように許すことにしました。すると私の人生は好転しました。起業家になろうと決心した私は、今ではスイカ栽培で生計を立てており、常時 5 人の若者に仕事を提供しています。

「ルワンダ和解指標」調査によれば、現在では、私のようにガチャチャ法廷のおかげで変わることができた人々の 98%以上が、自分の子どもたちに自分たちはフツ族やツチ族、トゥワ族ではなく、ルワンダ人だと考えてほしいと答えています。

ルワンダは非常に短期間に大勢の国民を失いましたが、それにもかかわらず、アフリカでは 2 位、東アフリカでは 1 位の発展を遂げています。私たちは団結すれば、国と世界の発展に貢献することができるのです。もし、ガチャチャ法廷という文化がなければ、ジェノサイドのイデオロギーという悪魔が私の心から消え去ることはなかったでしょう。

自分の文化を重荷と思わず、経済的発展を導くきっかけにしよう。私は今、世界中のすべての若者にそう呼びかけたいと思います。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】 優秀賞

希望の光

（原文は英語）

キーアン・チャン（12 歳）
カナダ＆台湾＜台湾在住＞
台北アメリカン・スクール

「文化」は辞書に載っている言葉の一つで、よく話題に上ります。文化という言葉は人によってさまざまなことを意味し、食べ物や着る物、歌、踊り、芸術を指すこともあれば、行動や宗教上のしきたり、教育、躾などを指すこともあります。文化（culture）はたった 7 文字でできた言葉ですが、文化には、感じ方や態度、考え方を形作る、持続的な影響力があり、そうした感じ方や態度、考え方によって個人、地域社会、国としてのアイデンティティが決まります。文化とは、一つの国や地域内の人々を結び付ける力を持つものです。世界には、人々が誇りとする様々な独特の文化がたくさんあります。私の両親は台湾出身で、台湾には私が誇りに思う伝統行事が一つあります。それが「天灯祭り」です。これは犠牲、絆、願いを象徴するしきたりです。

平渓に住む人々によれば、天灯（スカイランタン）を空へ飛ばすしきたりは、清朝にさかのぼります。その昔、無法者の集団が度々平渓の村々を襲いました。そのせいで、村人は山などに避難しなければなりませんでした。見張り役の人たちは天灯を使い、避難した村人に、もう安全で、家に帰れるようになったことを知らせました。この素朴な昔話は、村人が間違いなく、安全に帰れるようにするために、見張り役が奮い起こした勇気と払った犠牲をよく物語っています。天灯祭りが、台湾文化に欠かせないものになっているのは、私たちの世代が当たり前のように受け止めている安全や自由を守るために、先祖が払った犠牲を絶えず思い出させてくれるからです。この祭りは、私たちが今持っているものを大切にし、そのありがたみを理解する気持ちを日々呼び覚ましてくれる贈り物なのです。

また、この独特の祭りは人々を一つにまとめる力も持っています。天灯を空へ飛ばすには、全員が団結して、協力しなければなりません。これにはたいてい 2 人から 7 人が必要なので、家族や友だち同士が楽しみながら、気持ちを通じ合わせ、お互いの絆を深めることができるのです。ここ台湾の平渓天灯祭りでは、何百、何千という天灯が一斉に空に昇っていくのを人々は見守りながら、祭りに参加できます。この祭りは世界中から大勢の人を呼び込んでおり、その人たちはたくさんの天灯が空に飛ばされていくのを見守ったり、天灯飛ばしに参加したりしています。この祭りは同じ興味を持つ人たちを引き合わせ、友だちになるきっかけにもなっているかもしれません。天灯が暗い空を埋め尽くすと、何か不思議なことが起きているような感じがします。温かさや喜びが、祭りに居合わせた人たちを包んでいるような気がするのです。

また、天灯が台湾文化の大切な一部となっているのは、天灯が希望の象徴だからでもあります。現代の天灯は人々の願いを運んでいます。空へ飛ばす前に、天にメッセージを届けてもらえるよう、天灯に願いや希望、夢を書いておくのです。天では、神様たちが天灯を見て、送られてきた願いや希望、夢を何でも叶えてくれると言われています。願いや希望、夢を書くというしきたりが行われているのは、この 20 年ほどです。とても感動的な体験となるので、これからも続けていってほしいと思います。未来の世代が希望の炎を消してはいけないのは、いつかその希望が実現するかもしれないからです。

天灯は過去と未来の橋渡しをしてくれます。このしきたりは、過去を大切にする心を育み、未来への希望の光を与えてくれます。私たち皆が共有するものや、守るべきものを理解することで、共により良い明日に向けて前進することができます。人種、民族、信仰に関係なく、一つ確かなことは、私たちは皆、未来に希望があると信じていることです。平渓の天灯はその証となっています。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】 優秀賞

すべての人のための道

（原文は英語）

川田　遥（14 歳）
千葉県
市川中学校

今でもよく覚えているのですが、母の話にとても驚いたことがあります。それは、毎日の生活で必要なご飯を食べている時のことでした。お茶碗にご飯粒を残して、母に厳しく叱られたのです。「お米一粒一粒には 7 人の神様がいらっしゃるのだから、食べ物を粗末にするのは悪いことだ」と。

私には母の言っている意味が分かりませんでした。私は幼少期の大半をイギリスで過ごし、一神教であるカトリックの学校に通っていましたので、一人の神様を信じることを学びました。当時、私はちょうどイタリアを訪れたばかりで、神の使いと理解していたローマ法王のお姿も拝見しました。私は法王の真摯なお祈りと法王の神に対する忠誠心に感銘を受けました。ですから、花の神様、風の神様、さらには米粒の神様など、たくさんの神様を信じる日本の信仰は、私にとって理解し難いものでした。私はこの問題に頭を悩ませ、どちらが果たして正しいのだろうかと悩んでいました。

このことがずっと頭に残って離れないまま、私は日本に帰国しました。その後、日本の学校でのことです。ある授業で、クラス全員にそれぞれ米一粒とバケツが手渡され、先生から稲を育てるよう言われました。簡単なことだろうと思ったのですが、実際にやってみて、その骨の折れる大変な作業に本当に驚きました。稲は強い植物では決してなく、栽培にはたくさんの水と手間が必要でした。毎日バケツに何杯も水を運ぶ作業など、とても大変で疲れ果てました。やっと収穫の時が来た時、この植物に対する崇拝の気持ちが心の中で大きくなっていました。私は、この気持ちこそ、これまで私が頭を悩ませていたたくさんの神様の正体ではないかと気付きました。信仰とは、私たち皆が持っている敬意の念そのものなのではないでしょうか。

この体験を通じて、私は、宗教はどれもそんなに違わないのではないかと思うようになりました。私たちは様々な神様を信じているかもしれませんが、結局のところ、神様への祈りは、私たちが、自然、地球そしてお互いに対して示す敬意のしるしなのだと思います。外面から見れば異なるかもしれませんが、傾きや切片は違っても、一点で交わる二つの放物線グラフのようなものではないでしょうか。異なる文化は、人間に共通して見られる類似した根本的な考えの上に構築されたものです。この体験をするまでは、私は一人の神様を信じて、多神教文化の概念を心の中で否定していました。しかし、私たち自身の心にある、こうした固定観念は、とりわけ異文化間理解において、他者を理解する上で最大の障害になるものであり、打ち壊すべきものです。

最近のことですが、我が家ではホストファミリー・プログラムに申し込みをしていたので、アメリカの女子大生が我が家に一晩滞在しました。食事中、働き方が話題になりました。彼女は、日米の労働時間の違いについて話してくれました。日本人の労働時間の方がはるかに長いです。実際、私の父は毎晩遅くに帰宅します。労働時間は違っても、日本人もアメリカ人も家族を大切に考えていることについては、私たちの意見は一致しました。アメリカ人は家族を大切に思っているからこそ早く帰宅し、一方、日本人は同じ理由で長時間、懸命に働くわけです。以前だったら、私は日本人の働き方を擁護し、アメリカの文化を否定していたでしょう。根底にある共通の価値観を見つけようとすることが、異文化間理解の鍵です。

異なる文化の実際の姿をより良く認識し、理解することが若者にとって大きな宿題だという気がしてなりません。私たち一人一人が、これこそがなすべき課題であることを認識し、他の文化を理解するために努力することが必要です。学校で学ぶ他の科目と違い、教科書も正解もありません。一人一人の努力が、私たちが共に築いたと誇りをもって言える道を、私たちを明るく新しい未来に導く道を、形づくっていくのではないでしょうか。中国の作家、魯迅は著書『故郷』で次のように記しています。「もともと地上には道はない。歩く人が多くなれば、それが道になるのだ」

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】 優秀賞

境界線を越えて

（原文は英語）

シディク・マウラナ（24歳）
インドネシア・ジャカルタ・ティムール市

マレーシアが挑発！

インドネシア、マレーシア両国間の緊張が高まる度に、インドネシアでは定期的にこの種の表題のニュースが多くの新聞紙面やテレビを賑わします。密猟や国境紛争問題に関するものが一般的ですが、民族舞踊あるいは伝統的な歌や楽器などについての文化的な主張の場合もあります。食べ物やソースのレシピを巡っての場合すらあります！ 些細な取るに足らないことに思われるかもしれませんが、そうした問題を重視するインドネシア人もいるのです。両国間の緊張が高まっている時には、マレーシアに対する悪口が蔓延し、少しでも彼らをよく言うものなら裏切り行為ととられかねません。

ジャカルタで育った私も、かつてはマレーシアとその国民についてメディアが描く悪いイメージに同調していました。インドネシアの豊かな自然と文化遺産を盗もうとする独自性もない盗作者の集まりだと思っていました。でも、そうした憎悪が急速に広まり、どこに行っても耳にするようになると、私は、何か間違っているのではないかと思うようになりました。確かにインドネシアはマレーシアとの間に問題を抱えている。しかし、それはそれほど深刻なものなのだろうか。国民全部がそうだと一般論で片づけていいものだろうか。憎悪は問題を解決するのか。その答えを私はジャカルタやクアラルンプールのメディアではなく、まさに両国の国境で見つけたのです。

ボルネオ島の突端、南シナ海の湾に面する孤立した静かな村でのことでした。私はそこで一カ月、村人と共に暮らし、ココナッツを採ったり、牛に餌をやったり、月明かりの下で歌を歌ったりと、彼らの日常の営みに慣れ親しむようになりました。大都会の喧噪とは程遠いシンプルな生活。私は、村人たちがお互いのことをいかによく知っているのかに驚かされました。村のはずれに暮らす少年はもう一方のはずれに暮らす老婆とも知り合いです。村人全員が仲間であり、一人一人が知られるに値する存在なのです。村全体が本当に一つの大きな家族のようでした。そして、それだけではないのです。

テマジュクという名の村だったのですが、峠をはさんですぐ隣にマレーシアの村テロク・メラノがあります。テマジュクを訪ねる前、インターネットでこの村について私が見つけたことは、マレーシアとの国境紛争に関するいくつかのニュースだけでした。しかし実際村に住んでみると、実情は言われているよりはるかに平穏なものでした。テマジュク村とテクロ・メラノ村の人たちは友だちでした。

村人たちは、毎日、国境を越えて行き来し、商いをし、社会活動をしていました。お昼の3時か4時になると、テロク・メラノ村の若者がテマジュク村の若者とサッカーなどをしにやってきます。どの

人もまったく普通で穏やかでした。私は「紛争なんてどこに」と思わず思ったほどです。

隣人を愛せよという教えは、実際、多くの文化や社会に深く根付いています。その土地土地では、そうするよう促されるものですが、国際的な文脈でとなると、なかなか実践できていません。カンボジアとタイ、インドとパキスタン、中国と日本。大抵の場合、最も近い隣国と問題を抱えている場合がほとんであるのは、悲しい事実です。ある晩、私は村の結婚披露宴に招かれました。老いも若きも、男性も女性も皆、音楽が奏でられる中、楽しげに踊っていました。一人の子どもに踊りの輪に加わるよう誘われて、私も応じるしかありませんでした。パーティの賑わいの中で私が知らされたのは、大勢の出席者のほぼ半数がマレーシア人だということでした。「えっ」と、驚くほかありませんでした。外見は皆同じようで、同じ方言を話していたので、まったく区別がつかなかったからです。その時です、いわゆるナショナリズムという境界線は、私たちが自分たちの頭の中で作り出した幻想にすぎないのだと気付きました。海と熱帯雨林に囲まれ、ひとところに隔離されて暮らすテマジュク村とテロク・メラノ村の人々は、友情とは何か、信頼とは何かをしっかりと分かっているのです。インドネシアやマレーシアの各地に広まっている憎悪とは程遠い連帯感。

結局のところ、私たちは、一つの孤立した村に暮らしているのです。私たちが共に住む地球という村です。銀河系の中で私たちが有する唯一無二の惑星なのですから、賢く共有してください。地平線の彼方に、狭いアイデンティティを越えて、耳を傾けてください。私たちが呼吸する空気、私たちが共有する遺伝子、私たちが見つめる月、そう、すべてが、私たちが一つであることを語りかけています。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】 優秀賞

個人と文化の関係

（原文は英語）

ヌラナ・ラジャボバ・オクタイ（24歳）
アゼルバイジャン・バクー市

私にとって初めての異文化体験は、母国アゼルバイジャンで米国の平和部隊（※教育や農業などの分野での発展途上国援助を目的とする米国の長期ボランティア派遣プログラム）のために働き始めた時でした。言語・異文化ファシリテーターの任に就いた私は、現地語（アゼルバイジャン語）と文化研修のクラスの担当となり、入隊前研修期間中に米平和部隊のボランティアにアゼルバイジャンの慣習、文化規範、価値観について情報を提供する主担当として働きました。私にとって新しい観点で物事をとらえ、生活のあらゆる面について自分の見解や見識を構築していくという点で、興味深く、またやりがいのある経験でした。

文化ファシリテーターとして、私は様々な社会に存在する文化の概念や異なる価値観について学ぶことができました。この経験は、アメリカ文化について学ぶだけでなく、自国の文化を再発見する機会にもなりました。私は、自身の文化を第三者の視点から見始めました。研修生からの文化に関する質問に答える中で、私は、自分の文化の特性に気付くようになりました。この経験がなければ、そのような特性について自問することもなく、気付かぬままでいたでしょう。様々な文化的背景の人々と一緒に働きながら、私は、自分たちとの間にある数々の違いに気付くと同時に、地理的に離れていても、あるいは言語や歴史の違いなどがあるにもかかわらず、多くの類似点があることに驚かされました。

平和部隊での経験、そして、その後の多文化環境での経験を通じて、私は、文化は善し悪しではなく、あるがまま受け入れるべきものであることを学びました。また、この経験が私に残してくれた最大の教えの一つは、私たちの生活における文化の役割を知ることができたことです。私は、生活の一つ一つの側面に文化を見出すようになりました。私たちの言語、伝統、物事のやり方は、単なる挨拶の仕方から国を治める方法に至るまで、私たちの内にある文化の影響を大きく受けています。文化は私たちの生活の内なる部分であり、行動、知見、反応等々に大きな力を持っています。

個人と文化の関係について深く考えてみると、個人と文化のこの強い結びつき、文化が個人に及ぼす多大な影響に本当に驚かされました。しかし、つい最近のこと、個人と文化のこのような力関係とまったく正反対のことを経験する機会がありました。文化が私たちに影響力を及ぼして私たちの行動を形づくるだけではなく、私たちにも文化を形づくる大きな力があることを学んだのです。

私の考えをもっと明確に説明するため、その経験を簡単にお話ししたいと思います。世界各国から

参加者が集まる夏季平和構築研修に参加した時のことです。様々な大陸、国から様々な背景、文化、年齢層の人が集まりました。

一カ月以上共に過ごす中で、一番印象深く心に残ったことは、そのような多様な環境にあって、私たちはまるで家族のように感じたことです。私たちは、それまでその地名を聞いたこともなかったような様々な所から来た人たちと友だちになりました。私たちのこうした美しい関係について、私たちの実に多様な環境の中での真なる平和について考えた時、私は、私たちの意志、つまり平和であろうとする意志が、その鍵であると理解できるようになりました。私たちは、それぞれが多様な背景の中で育ったことを知りながらも、様々な違いがある自分たちをお互いに受け入れたのです。たくさんの異なる文化が一緒になって、自分たちの新しい文化、平和と友情と分かち合いの文化を創り出したのです。この経験を通じて、私は再び、私たちには文化を創造する力があり、最も重要なこととして、私たちが望み、努力してこそ、平和の文化の構築が達成され得ることを実感できたのです。

平和の文化こそ、平和でより良い未来の鍵となる要素だと思います。なぜなら、平和の文化があってこそ、私たちは個々の違いを、紛争の原因としてではなく、私たち自身を豊かにする方法として見ることができるでしょう。平和の文化があってこそ、私たちは、類似点を生み出すばかりでなく、相違点を尊重することによって、そうした相違点を大切に保つことができるでしょう。従って、世界の全ての社会に平和の文化を構築することが、私が未来に望むことであり、私たちがそのために一生懸命努力すれば、いつの日か実現できると信じています。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】 入選

単なるおもちゃではない

（原文は英語）

アナスタシア・レベデンコ（10 歳）
ウクライナ・モナスチリシュチェ市
第 5 小学校

皆さま

私はアナスタシア・レベデンコです。ウクライナの首都キエフから 250 キロのウクライナの中心部にある人口およそ 9 千人の小さな田舎町に住んでいます。これといった名所はありませんが、きれいな空気、緑豊かな森、はてしなく広がる野原などこの地方のとても美しい自然、そしてやさしくフレンドリーな人々に親しんでもらえるところです。何世代も通して結びつきの強い家族は、その伝統を守り、食事を共にし、一緒に散歩し、遊び、休暇を過ごすなど家族とともに過ごす時間を大切にしています。また、心を開いてどんな人も歓迎し、温かく広い心で迎え入れることを教えてくれる自分たちの文化を愛しています。

私は、ウクライナ人であることを誇りに思っています。ウクライナの歌を歌うとき、伝統的な縦笛ソピルカが奏でるメロディを聴くとき、全校集会で青と黄色の国旗を掲揚するとき、そして祝日には私の４歳下の妹と一緒に民族衣装で着飾るとき（ふたりともとてもきれい！）、私は幸せを感じます。

私は、文化をよりよい未来のためにどのように活かすことができるのか、知っています。というのは、経験したことがあるからです。ある日担任の先生がクラスの皆にインターナショナルスクールの「サイバーフェア」というプログラムへの参加を呼びかけてくださったのがきっかけでした。私たちは、地元の文化的なおもちゃ(伝統的な玩具)のことを調べることにしました。「おもちゃなんて」と思う人がいるかもしれませんが、真面目な話です。私の祖母カティアは、「すべてはおもちゃから始まる」と言います。プロジェクトに取りかかってみて、私は、その意味がよく分かりました。

本当にいろいろと調べました。その過程で、両親、先生方、学校の友達、近所の方達、地元の人形職人とその家族、司書、地元の歴史博物館の館長さんなど、さまざまな人たちに連絡を取り、お話を聞きました。そうした中で、私たちは、おもちゃは単なるおもちゃではないことがよくわかりました。おもちゃは伝統的な民芸品のひとつであり、国の長い歴史、精神そして文化の継続性を伝えるものです。信仰、世界観、好み、その土地の風習など、すべてが民俗玩具に映し出されています。

クラスの皆で力を合わせ、ウクライナの民俗人形であるモタンカをセント・ニコラスデーまでに 20 体以上も作りました。そこで、地元の寄宿学校を訪ねて小さな子どもたちにモタンカをプレゼントしようと決めました。私たちは、地元の人形師の方から学んだお話やウクライナの伝統について彼らに

伝えました。私たちの小さな仲間はとてもとても喜んでくれました！ 簡素な手作りのおもちゃが子どもたちを幸せにする様子を見て大変感動しました。

私たちの働きかけで地元の歴史博物館での展示と研究が始まりました。当初博物館の方たちに人形をぜひ取り上げてほしいとお願いすると、彼らはとても困った様子でした。伝統玩具の展示や私たちの歴史や文化遺産に関連する展示は一切なかったからです。私たちは人形職人と博物館の館長さんに交渉しました。その結果、人形職人の先生と私たち学校の生徒が作った伝統的玩具が収集されることになりました。

私たちはまた、民芸品の衰退を食い止め、伝統を復活させるために、他の国々の子どもたちにも一緒にやろうと持ちかけました。私たちがまず先頭を切って iEARN「ナショナル・トーイズ（国の玩具）」プロジェクトを開始し、アメリカ、ロシア、トルコ、ルーマニア、パキスタン、台湾、ベラルーシ、インドネシアの仲間にもこのおもちゃ作り文化への参加を呼びかけました。私たちは、自分たちの国の写真、ビデオ、玩具を紹介しあいました。また、スカイプを使って参加者と会議を開き、「文化の袋（Culture Bags）」を郵便で交換しました。最高でした！

最後に言いたいことは、簡素なおもちゃが私の人生をすでによりよいものに変えた、ということです。私の人生はさらに楽しいものになりました。私は多くを学び、多くを実践し、外国にも友達ができました。そうです、様々な人たちがいて、いろいろな文化があるのです。でもそうした人たちとも、文化を通じて友達になれることがよくわかりました。友達になると、お互いを尊敬し、愛するようになり、私たちによりよい未来が訪れるのです。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】　入選

千年の知恵

（原文はスペイン語）

アンヘル・マオンリ・カバリェロ・オルテガ（11 歳）
メキシコ・ユカタン州
イグナシオ・サラゴサ小学校

こんにちは！　僕の名前はマオンリです。美しい国メキシコのユカタン州の都市メリダに住んでいます。僕の街には、昔から「白いメリダ」や「高貴で忠実な街メリダ」といったいくつもの呼び名が付けられてきました。近年では「平和の街」と呼ばれており、僕はこのことについて書きたいと思います。

物心がついたころから、両親は、人間同士、国同士、そしてすべての生物との関係で一番大切なものは敬意だと教えてくれました。またマヤ文化が人間を取り巻く自然やすべてのものに大きな敬意を払っていることも教えてくれました。

僕の住んでいる街の近くにある遺跡を訪れたときに知ったのですが、この地域に住んでいた古代人は環境への影響をできるだけ少なく抑えながら、より快適に生活するために必要な工夫をしていました。僕はそのことに驚き、感心しました。それは本当に素晴らしかったのです！

最近では、人間が世界を破壊しているということをニュースでよく耳にします。だからこそ、現代に生きる僕たちは過去に目を向け、先祖の知恵から学ばなければなりません。

僕が自分の文化で最もすばらしいと思うのは、環境や他の人々に害を及ぼすことなく、しきたりや伝統を守っているコミュニティが今でも存在することです。

僕たちが今も守っている伝統には、踊りや衣装、儀式などの他、読むのも難しく、発音するのはさらに難しいマヤ語があります。僕の学校では、普通の授業の他にマヤ語の授業もあります。「おはよう」という意味の「Ma'alo'ob k'iin」と口にするのは、とても楽しいです。

先祖から伝わる伝統で、一番重要な部分が、環境と家族を大切にするということです。その理由は、僕たちの生活がそのふたつなしには成り立たないからです。

ある日、僕は友だちと一緒に「マヤ大博物館」に行き、この地域の古代人が植物を植えたり、収穫したりするためにどんなふうに道具を利用していたのかを学びました。また、古代人が海で魚を獲っていたことと、海岸でたくさんの塩を造っていたことを知りました。こうした事柄のすべてが、交易や物々交換を通じた他の文化との交流に役立っていたのです。

マヤ人は他の文化を知ること、そして取引相手を選ぶことにいつも慎重でした。でも、マヤ人は自分勝手だったわけではなく、占星術や数学の知識を他の文化の人々に教えていました。

僕がなぜこんなことを書いているのかというと、答えは単純です。その頃から何世紀もたった 2013 年にあっても、僕が賢いマヤ人の子孫であることを誇りに思っているからです。マヤ人の文化と伝統を知ることに夢中なのです。

僕はマヤ人の教えに従って生活するようにしています。その方法は、環境を大切にすることであり、あらゆる機会をとらえて他の人たちの役に立ち、自分のコミュニティで正しい行いをすることで得られる幸せな気持ちをその人たちと分かち合うことです。でも実は、僕にとってそうすることはいつも簡単というわけではありません。僕はまだ子どもですが、活発過ぎて注意を払うのが難しいこともあるのです（僕は ADHD〈注意欠陥・多動性障害〉です）。それでも、友だち、近所の人たち、家族に、自分を大切にして守らなくてはならないのと同じように、より良い未来のために地球を大切にして守るべきだと気付いてもらえるように努めています。

今、僕には分かち合いたいアイデアがたくさんあります。時々、僕は気持ちが抑えられなくなり、「僕らの世界を大切にしよう！」と叫びながら外を走りたくなります。僕がどうかしてるんじゃないかと思うかもしれないけれど、僕が自分のコミュニティで声を上げれば、それがどんどん盛り上がって、いつかは皆が気付いて、より良い未来と平和な国、そしてより良い世界にするために、それぞれの役割を果たすようになると思います。

知るだけでは十分ではありません。大切なことは、実行し、広めることです。それこそが知恵ある人間なのです。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】 入選

より良い未来をつくる文化の力

（原文は英語）

シャー＝ミール・アイザズ（13 歳）
パキスタン・カラチ市
スプリングフィールド・スクール

目の前に長くまっすぐ伸びる灰色の道。両側に連なる草木、そして一面に広がる黄色のマスタード畑が目を楽しませてくれます。しかし、息をのむほどに美しいのは、朝 6 時頃、日の出の光景でした。畑では 2~3 人の農夫が働いていました。私が本当に目を奪われたのは彼らの衣服です。一人は伝統的な帽子に色鮮やかな服を着ていました。私が話しかけると、その男性は最高の敬意を払って答えてくれ、とても礼儀正しい人だということが分かりました。彼はとても美しい自分の小屋に私を連れて行ってくれ、お茶をごちそうしてくれました。彼のライフスタイルについて話をしたのですが、驚いたことに、今では私たちの生活に不可欠となったテレビ、コンピュータ、ラジオなどがまったくない中で、その農夫は幸せに暮らしていることを知りました。彼は、こうした伝統は何世紀にもわたって代々受け継がれてきたものだと、話してくれました。「家族がいて、子どもたちが学校に通っている。それだけで幸せです。それ以上望むことはありません」と言っていました。電子器具や電化製品がなくても、満ち足りているのです。それは何よりも、彼の心の中で大切に守られている伝統文化のおかげです。彼の心がくじけるようなことがあるとすれば、それは神のご意志のほかないでしょう。

このような素晴らしい出会いがあった後、私はラホールに向けて旅を続けました。さまざまな素晴らしい文化に出会い、パキスタンのあらゆる階層や民族の人たちとおしゃべりをし、彼らにいろいろなおいしい食べ物をごちそうになりました。そして、パキスタン中を楽しんで巡りながら、田舎の人たちの方が都会暮らしの人たちよりはるかに楽しく暮らしているのではないかと気付いたのです。都会に暮らす人々は、さらに多くを求めるのが常です。それは、たくさんの「高級品」といわれるようなものを目にしているからです。それに対して田舎暮らしの人は今あるもので満足しています。ことわざで言えば、「半斤のパンでも無いよりいい」ということでしょう。伝統の下、結束している彼らには、はるかに明るい未来があるのです。都会に住む私たちにしても、祖父母の時代はもっと保守的で辛抱強く、満ち足りていました。しかし時代とともに都会化され、私たちの人間性も変わり始めました。

「過去の歴史を知らぬ人々は根のない木のようなものだ」。　これは、ジャマイカの政治指導者でジャーナリスト、演説家でもあったマーカス・ガーベイの言葉です。都会暮らしの人は、自分たちの過去の文化について本当に何も知りません。たとえ知っていたとしても、奇妙に見えるのではないか、あ

るいは変に思われるのではないかと思って、そうした文化を自分に活用しようとはしません。これに対し、田舎に暮らす人たちは、伝統を捨てようとしたり、新しい今風の暮らしに合わせようなどとは一切考えないでしょう。その理由は、それらの文化は代々受け継がれてきたものであり、愛する国パキスタンの象徴だからです。だからといって、変化が悪いと言っているわけではありません。プラスの変化でなくてはならないのです。

旅で出会った農夫のことを私はよく思い出します。彼は私の考え方をすっかり変えました。彼は、国のために本当に一生懸命働く誇るべきパキスタン人です。あらゆる文化の人が手を結び、一つの旗の下で結束すれば、国は一つになって真の繁栄に向けて進むことができるのではないでしょうか。あの農夫に出会ってから、私は、自分の文化を尊重し、敬意を払うよう最善を尽くしてきました。世界中どこに行っても、自分の人格が自分の国の文化を表すことになるからです。母国パキスタンを尊敬してもらえるかは自分次第です。私が人々にどのような国の印象を与えるかにかかっているのです。

世界人類が平和でありますように。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】入選

文化ってすばらしい

（原文）

末満 樹林（14 歳）
東京都
東京学芸大学附属国際中等教育学校

私は、よりよい未来をつくるために文化の力を活かすには、まず、いろいろな国の文化を知ることが大切だと思います。

世界には 190 あまりの国があります。私はその中の五つの国に住んだことがあります。五つの国とは、マレーシア・ブータン・ウガンダ・インドネシアそして日本です。

それでは、最初にブータンとインドネシアで私が知った文化について書きます。まずはブータンです。ブータンはとても小さな・幸せで溢れた国です。私が紹介したいブータンの文化とは、学生は皆、民族衣装を着て登校するということです。私の姉二人も「キラ」と呼ばれる女性の民族衣装を着用して学校に通っていました。ブータンのように学生が民族衣装を着て学校へ通う国は世界中探しても、ごくわずかしかないと思います。滞在中はあまり深く考えませんでしたが、今にして思えば、昔からの風習を守り続けているブータンの人々は、とても誠実であると思いました。

次はインドネシアです。インドネシアで私が知った文化とは「犠牲祭」です。これはイスラム教の行事で、お金持ちの人が、普段牛やヤギの肉を食べられない貧しい人々に肉を提供するということをします。私は家族で捌く様子を実際に見に行きました。男性たちの捌く作業の様子を見たのですが、とても手際よく丁寧に裁く姿は、思わず「ホー」と声が出てしまうほど私の心に残りました。私はこの行事で二つのことが印象に残っています。一つ目は牛やヤギから取ったばかりの血が、とてもきれいな赤であったことです。マグマのような赤からは生命の強さが感じられました。二つ目は男性が捌いた後の肉を、一人の男の子がうれしそうに女性のもとへ持っていったことです。両手で生のヤギの肉を大事そうに持つ男の子の目はすごく生き生きとしていました。「犠牲祭」を見たことのない人の多くは、この行事をとても残酷なものとして捉えるかもしれません。しかし、私は「犠牲祭」を見たとき「残酷だ！グロテスクだ！」といった感情は微塵も感じませんでした。それはきっと、作業をしている人たちが、みんな生き物に感謝するという神聖な文化の中で生きてきたからだと思います。私は「犠牲祭」から文化の持つ力の強さ・素晴らしさなど、たくさんのことを感じ学ぶことができました。

このように一つ一つの国は、人間のように個性つまり文化を持っています。私はその文化を多くの人が知るためには「文化デー」を作るといいと思いました。

それというのも、ウガンダのインタナショナルスクールでは実際にそのような日があったからです。どのようなことをするかというと、生徒は自分の国の民族衣装を着て登校し、お父さんやお母さんが

開いた自分たちの国のブースを回ることをしました。たくさんの国の文化を一日で知ることができてとても楽しかったです。グローバル化が進み、違う国で生活する人が増えている今、このような日を世界中の国でつくれば、より多くの国の文化を知ることができると思います。

私たちはよく文化の違いで他者を差別したり偏見を持ったりします。それはきっと、いろいろな文化を知らなかったり文化の表面だけを見て判断してしまうからだと思います。私も最初は「犠牲祭」に対して残酷なイメージしかありませんでした。しかし、実際に近くで見て、神聖な行事であると見方が一変しました。その国の文化をしっかりと見るだけで、偏見や差別はなくなることがあります。様々な国の文化を知り、尊重し合うことこそが『平和な未来』をつくる道だと思います。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【子どもの部】 入選

世界へ羽ばたくための能力

（原文）

中森 美希（15 歳）
千葉県
市川中学校

「合気道」をご存知ですか？ 900 年以上前に始まった大東流合気柔術に、戦後、植芝盛平氏が日本古来の剣術などを取り入れて、独自の工夫を加えました。そして確立したのが「合気道」です。日本が生んだ強く美しい武道、合気道は、日本の精神を反映しています。

私は小学生の頃、体育が大の苦手でした。それでも何か運動したいなと思っていた時に武道に興味を持ち、母が合気道を勧めてくれました。合気道を始めてはや 5 年。今までに多くの経験をしました。それらを通し、日本の誇れる文化である合気道は、日本の現代社会、また、国際社会に通用する人材育成に大きく貢献している、と考えました。理由は二つあります。

一つめに、合気道が争わない武道だからです。互いが勝者となり、相手を敗者にしないのが合気道の目指すところです。したがって、稽古自体を全員一緒になって楽しむことができます。子どもにとっては相手と争うということよりも相手と仲良くする、楽しくするということが非常に心の成長にプラスになると思います。これによりコミュニケーションが円滑に進みます。それは大人同士、子どもと大人でも同じことです。同年代の友だちだけでなく、大人の方と共に稽古できる機会が多いのもこれに起因していると思います。合気道をやっていると自然にコミュニケーション能力が高まってくるのです。この能力は、国際社会において最も重要な能力の一つです。

二つめに、合気道が一体感を求める武道だからです。相手と気を合わせ、相手と一体になるために稽古をするのが合気道の本質です。真っ白な気持ちで相手に気を合わせようとすることが一体感を作ります。そして、この一体感を作るのが案外難しいんです。今までに自分で相手と気がぴったり噛み合ったと感じることができたのは、片手で数えられるほどの回数しかありません。そして、私はなぜ、なかなか相手と一体になれないのかに気づきました。まず、相手に対して思いやりの気持ちが必要です。自己のペースを貫いていては一体になれないのです。相手が外国人でうまく言葉が伝わらず、とまどったりしていてはだめです。相手が小さな子どもでなかなか言うことを聞いてくれないからといって、いらいらして感情的な態度をとってもいけません。互いに思いやりの気持ちがあれば、それぞれが相手のペースに合わせようとして自然に一体感が生まれてきます。合気道に言語や年齢は関係ありません。一体感を作るために稽古するのです。私が嬉しかった経験は、外国の道場生の方とほとんど言葉は通じないのに、合気道を通じて親しくなれたことです。このように相手と一体になって新しいものを創造していく、相手と新しい価値を生み出していくことが現代の日本、そして国際社会に求

められていると思います。

現在、合気道の国内の愛好者は 10 万人、国外の愛好者は 60 万人で、その広がりはますます大きくなっています。争わず、自らの心と体を強く鍛えるという合気道の考え方が世界中に受け入れられている証拠だと思います。どんな問題に直面しても争うことなく、相手と一体となることで新たな道を探し出せる強さ、それは日本独自の文化が育くんだ強さとも言えます。そして、この強さこそがこれからの国際社会に必要とされる能力なのです。

日本が生み出した「合気道」は人々に新たな可能性を示しています。しかし、合気道を知っている日本人は何人いるでしょうか。その知名度は低いのです。私はこれからの未来にどんどん合気道を活かして世界に通用する日本人が増えてほしいと思います。だから、その第一ステップとして、武道必修化の項目に合気道が加わるなどして、より多くの人に合気道を知ってほしいです。そして、合気道を通じて国際社会へ羽ばたくための基本的な能力が身についていったらいいなと思います。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】入選

多様な文化の融合がつくる共生社会の島

（原文）

木田 夕菜（16 歳）
鹿児島県
鹿児島市立鹿児島玉龍高等学校

わたしは、今でも覚えている。熟れそうな工場に飛び散る火花の下で、橙色になるまでふいごで熟せられた鉄の塊が、まるで飴細工のように美しい曲線を描いた柄の部分へと変化していくその光景を。

ここはロケット基地で有名な種子島にある伝統工芸品「種子鋏」の工場。島内にその伝統を受け継ぐ職人は、もう数えるほどしかいなくなったと聞く。その刃を合わせる度に、乾いた金属音と共に切り進められていくその心地よさは、一度手にした者しか味わえない、高い技術に支えられた職人のみが為せる伝統技術である。

「こん鋏は、西洋と種子島の技術が五百年近く前に出会ったことで生まれたとよ。」

職人の方がふとつぶやいたあまりにも意外な言葉に驚いた。1543 年、日本の歴史の流れを左右することになる一隻の船が種子島にたどり着いた。その船に乗船していたポルトガル人が所持していたのが火縄銃だった。島主種子島時尭は、家臣に命じて、これと同じものをつくらせた。その後それは、戦国時代の日本において「種子島」という名前で時代を席巻することになるのだが、実はその時に鉄砲と同時に初めて日本にもたらされていたのが二枚の刃が中央で交差して裁断する様式の西洋ばさみだった。やがて江戸幕府が成立し、戦乱が収まると火縄銃の需要は極端に減るのだが、島の刀鍛冶は、鉄砲に代わり、この西洋ばさみの柄の部分に日本伝統の和ばさみの様式を取り入れた独自の様式をもつ「種子鋏」を創り出したのだ。

母方の祖父母が住むこの島の人々は穏やかな島民性を有している。時折、帰省する私にも人懐っこい笑顔で語りかけ、何かと世話を焼いてくれる。そのせいかこの島には昔から難破した米国や英国商船の乗組員を助け、介抱したという話が多く残っている。

この受容的な島民性が、異質な文化を拒むことなく、むしろそのよさを理解し、積極的に取り入れようとして生まれたのが種子鋏なのである。種子鋏のよさは、その切れ味の良さは勿論のこと、左右対称に作られたその形状にある。つまり、利き手に関係なくだれもが使いやすいものとなっているのだ。これは今で言うユニバーサルデザインであり、より多くの人々が使いやすいようにと考えた作り手の思いが込められている。この鋏に代表されるように、この島の文化の在り様は、多様な文化の融合と共生の上に成り立っている。「相互の風習と生活を知らないことは、世界の諸人民の間に疑惑と不信をおこし、そのために、あまりにもしばしば戦争となった。」これはユネスコ憲章に掲げられた言葉

である。種子島では、異なる風習や文化に出会う度に、それらに偏見をもつことなく、自分たちがこれまで守り受け継いできたものに生かしていくことで、新たな文化を形成し続けてきたのである。世界中のそれぞれの国やそれぞれの地域が育んできた文化がある。それらはそこに住む民族・人々の来歴を今に伝えるものであり、相互に尊重されるべきものである。だからこそ、それらを互いによく知り、理解し合うことで、その時代に応じた受容的で確かなものへと高められ、後世へと受け継がれていくのではないだろうか。

ここ種子島のロケット基地から打ち上げられたいくつもの人工衛星は今も、世界中を俯瞰して回っている。そしてそこには地図に引かれた国境線などないことを私たちに示してくれている。この島にロケット基地が建設されたのには、確かな意味がある。この手に不思議と馴染む種子鋏はそう伝えているように思えるのだ。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】入選

豊かな心を育む再利用

（原文）

佐藤 夏佳（16 歳）
東京都
昭和女子大学附属昭和高等学校

先日、私は英語の授業でワンガリ・マータイ氏について学んだ。ケニア出身で女性環境保護活動家だったマータイ氏は、2004 年に環境分野の活動家として、またアフリカ人女性として、史上初のノーベル平和賞を受賞する。マータイ氏は来日の際「もったいない」という言葉を知り、大変な感銘を受けた。他の言語に訳したり、置き換えたりすることが難しかった、この「もったいない」を世界中に広めようとしたことは有名な話である。

この独特のイメージや意味を持つ「もったいない」という言葉は、もともとは仏教からきているようであるが、私たち日本人は、その元来の意味とは少し異なる、かつ広い意味にとらえていると思う。特に「捨てたらもったいない」、「使わないともったいない」など、物を生かしきれない時によくこの言葉をあてはめているのではないだろうか。リサイクルという言葉などなかったはるか昔から、日本人は物を大切にし、上手に再利用し、最後まで使い切る工夫をしてきた。日本人とは切っても切れない存在の稲はその代表格の一つである。食べるための米を収穫した後の稲は草履などのわら製品に、もみ殻は枕の中身に、精米する時に出るぬかは石鹸がわりの汚れ落としやぬか漬けに、米のとぎ汁は食器洗いや肥料に、というように捨てる所が見当たらない。草履などのわら製品に至っては、使い古した物を集めてさらに畑の肥料にしたという。経験や先人から学んだことが頼りだったのだから、昔の人の知恵には頭が下がる。特に江戸時代の再利用は徹底されていて、物が壊れても直して使うのが当たり前で、生活の道具それぞれに修理専門の職人がいた。全てが手作りで、物を作ること自体が大変だった時代ということもあると思うが、物に対するその丁寧さには、やはり「もったいない」が人々の心に大きく広がっていたのではないかと感じた。時代が変わり、西洋文化が入ってきて、社会はどんどん変わっていくが、昭和の頃はやはり物が大切にされていた。日本の民族衣装である着物は祖母から母へ、母から娘へと代々引き継いで着られた。多少サイズが違っても問題はない。長い反物を切って、ほぼ直線だけで縫われている着物は、仕立て直されるのが前提だとも言われているくらいだ。着なくなった着物は布団や座布団の側地になる。それらに使った後に残った小さな布の切れ端は、巾着やお手玉などのおもちゃに。ここまでしてもらえたら物も嬉しいだろうなと、物の気持ちになってみたりした。

こうしてよく考えてみると、再利用は「もったいない」という理由だけなのだろうかと思う。ただ

単に初めの目的で使えなくなったものを別の目的で使う。ということもあるが、決してそれだけではない。一度役目を終えたものが形を変え、用途を変えて新しい物として命を吹き込まれる。ほどいたり、また縫ったりする時、その物にまつわることを思い出したり、これから使う人や場面を思い浮かべながら。そうして出来上がった物は、また生き生きと人の役に立つ。それはとても素敵で、心が豊かになると感じた。

「もったいない」は私たち誰もが理解し、持っている気持ちだと思う。でも、今はその大切なことに目を向けたり、考える機会が失われてしまっている。どんなに物が豊かでも、せっかく心が豊かになるチャンスを逃してしまっているのだとしたら、それはとても残念なことだ。物を大切にすることを考える。物との関わりを考える。これからは、そういう機会をもっとたくさん持ちたいと思った。そして「もったいない」の心と文化をきちんと伝えられる大人になりたいと思う。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】入選

より良い未来をつくる文化の力

（原文は英語）

シンバラシェ・カネウンイェンイェ（16歳）
ジンバブエ・ハラレ市
セント・イグナティウス・カレッジ

今の所に住むようになって5年になります。今でも近所に知り合いはいません。今のハイスクールに入学して4年になります。家族やこれまでのことなどをよく知っている友人は6人しかいません。オンラインでチャットをするようになって3年になります。でもチャット仲間に会ったことは1度もありません。これが僕の知っている世界です。僕が育っている世界です。僕を将来の大人にと形作っている世界です。

僕は、現代社会の数多くの被害者のひとりにすぎません。共同体として僕たちがどのように成長を遂げていくのかを気に掛けるよりは、いかにして他者を打ち負かし、独力で成功するかを教わっています。市民権活動家ブッカー・T・ワシントンはかつて、「人には力を発揮する方法がふたつある。ひとつは打ち負かすこと、もうひとつは手を差し伸べて助けることだ」と主張しました。僕が外出するとき、両手は必ずポケットに突っ込み、耳にはイヤフォンを着けて外部の音を遮断しています。道すがら人に挨拶をすることもありません。見知らぬ人に話しかけてはいけないと教わったからです。ほんの数人の知り合いに軽く会釈するだけです。この世界でおしゃべりする時間などありません。

これが、この世界での態度です。先程述べたように、「僕は、現代社会の数多くの被害者のひとりにすぎない」のです。他の犠牲者と言えば、十代での妊娠は増えるばかり、学校中退者も、あるいは、子ども兵士も増加するばかりです。子どもの行方不明者、子どものレイプ事件、子どもの殺人事件、いずれも増加の一途をたどっています。飲酒運転事故に巻き込まれた十代の若者や、同級生を虐殺した生徒など、よく耳にする話です。こうしたニュースは、かつては新聞の一面に載ったものですが、今ではビジネス欄の片隅に掲載されて、隅々まで読む数少ない読者が気付くだけでしょう。今ではこれが普通のことであり、あるいは少なくとも僕にとって普通のことでした。僕はこうした世界にすっかり慣れきってしまい、そこから救い出されることなどはないと思っていました。しかし驚いたことに、もうひとつの世界があったのです。

しばらく前のこと、僕は、村に住む親戚を訪ねました。まず感心したのは、小屋の配置でした。どの小屋も中心に面するようにと、円を描くように建てられていました。中心には、大きなあずまやがあって、村人が集まり、飲食を共にしたり、太鼓を叩いたり、ダンスをしたり、あるいはおしゃべりができるようになっています。驚くことに村のほぼ全員が僕の名前も、何者であるかも知っていまし

た。このような帰属感を覚えたのは、本当に久しぶりのことでした。これはまさに、僕が忘れていた伝統的文化のひとつ、家族です。ジンバブエの文化では家族という単位をとても大切にします。村では全員が家族であり、皆僕のことを本当に気に掛けてくれました。彼らにとって僕は単なるコミュニティの一員ではなく、彼らの一部でした。

僕は考えさせられました。もし世界全体がこのように思ったとしたらどうなるのか。もし世界が、本当にひとつの大きな家族として自分たちをとらえようと、ついに決めたとしたら。小枝1本は2本の指で簡単に折れてしまいますが、小枝も一束になればどんな手をもってしても折ることはできません。世界中のさまざまな文化が、あるひとつの重要性を強調しています。それは家族です。このような考え方が実現されれば、進められている悪事も食い止められるでしょう。真の人間であれば、兄弟の目を見詰めて、彼を殴ったり、強盗を働いたり、あるいは殺したりなどできません。僕たちが文化を忠実に守り、今後すべての人を家族として扱うならば、世界は間違いなく、より良いものとなるでしょう。やってみましょう、会う人全員に挨拶しましょう。あなたの生活の中の人々についてもっと知ろうと努力してみましょう。感じるその一体感に驚くはずです。このようにして、僕たちは文化の力を活かして僕たち皆にとってより良い未来をつくることができるのです。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】　入選

なぜ文化か？

（原文はドイツ語）

デムチャック・オリハ（17 歳）
ウクライナ・チェルノフツィ市

トラックのがたがた鳴る音、馬の蹄の音、絶え間ない歌、生き生きした会話や盛んな取引、「ウィシワンカ」と呼ばれるウクライナの伝統の刺繍で埋め尽くされる騒々しい市場、天まで立ち上る煙。これらは地元のお祭りの光景です。私が自分のルーツを感じ、大都市よりも自由を満喫できる場所です。この地域の多くの若者の夢は、首都に出て出世することなので、私は変わり者かもしれません。彼らは訛りを話したり、家畜の世話をすることを恥と考え、ライフスタイルを変えようとします。この傾向に気づいた時、私は多くのことについて自問自答を始めました。なぜ人は自分のルーツを恥じるのでしょう？　服装が古臭いから？　それとも他の理由で？　伝統は既に過去のものなのでしょうか？それとも未来に影響を及ぼす力をまだ持っているのでしょうか？

今では、伝統に力はないように思われます。世界はどんどんグローバル化し、共通文化・統一言語の確立、そして国際協力へと進んでいます。良いことのように聞こえますが、偏見なしに未来に目を向けてみましょう。実際、人々が求めているのは、一つになることではなく、飢餓がなく、より安全が提供されるような大規模で緩やかな社会システムだと思います。同化と模倣は、すでに多くの人々の生き方となり、宗教ではなく、特殊なカルトが影響力を持つようになっています。

例えば、観光収入を求める小都市は、その風情を失っていきます。その代わりに、そういった町にはどこにでもあるようなレストランやスーパーマーケットといったチェーン店が出現し、観光客が度々訪れたくなるような居心地の良さを提供しようとします。まるで奇妙なインキュベーターの中にいるように感じてしまいます。それは、特定の町の文化のみならず、人々の価値観についても言えます。私は一度、北ドイツの小さい町へ、あるグループを案内したことがあります。到着してすぐに聞かれたのは、「H&M」や「NEWYORKER」などのファッションブランドの店舗がどこにあるかという質問で、町の文化には全く無関心でした。

ですから私は、文化が私たちの生活にとっていかに大切かを若い人たちに教えることが大切だと確信しています。私の住む地域には、伝統的な踊りを教える素敵なクラブがあります。踊るだけではなく、本物の衣装を身につけるところが特に気に入っています。それはとても高価なため、皆が一生大切にするような衣装です。このグループはあまり人気がないのですが、小さな地域に一つだけでも自分たちの文化の記憶として残してほしいと望んでいます。現代の潮流にかかわらず、自分たちのルーツを守ろうとするこのような人々を、私は本当に誇りに思います。彼らのおかげで、世界がウクライ

ナ文化を少しでも知ることになると思います。政治経済の問題だけでなく、私たち民族について、もはや共産主義を崇拝せず、とっくにソビエトを離脱したウクライナ人について知ってほしいです。そして、ウクライナの若者こそが、この発展の証になるべきだと思います。第一に、私や将来の世代は、自国の歴史を知ることが必要です。その中には、インスピレーションとあらゆる問題に関する答えがあります。私たち民族は常に宗教的・文化的自由の権利を擁護してきましたが、このような自由を守るためにとられた最も重要な行動が国家の建設でした。

従って、私にとって未来は文化と強くつながっています。なぜなら、未来の世界をつくる教育は文化にかかっているからです。文化的発展なしに革命も、ラ･ジョコンダ（オペラ）も相対性理論もあり得ません。私たちに芸術がなければ、視覚も聴覚も失ったも同然です。伝統を失えば、自分たちのルーツも魂も失ってしまうのです。

2013 年度国際ユース作文コンテスト
【若者の部】入選

開発のための夕食後の団らん

（原文はスペイン語）

ヒメナ・クルベロ（20歳）
ウルグアイ・モンテビデオ市

私は、世界の南の端に位置するウルグアイに暮らす20歳のシメナ・クルベロです。ウルグアイと言えば、マテ茶、タンゴ、サッカー、カンドンベ（ウルグアイの音楽）の国ですが、これらの4つは、ウルグアイ文化を特徴づけるもので、我が国のイメージとして世界によく紹介されているものです。しかし私は、必ずしも紹介されてないもうひとつの特徴を挙げたいと思います。それは、伝統的に日曜日に持たれる夕食後の家族団らんのひとときです。自由に意見交換や議論がなされるとても特別なコミュニケーションのひとときです。その時の関心事に応じてさまざまな話題が取り上げられることが多く、食卓を囲む人たちは、まったく正反対の意見を戦わせるなど、数々の異なる観点が披露されます。議論は白熱し、何時間も続くこともよくありますが、私たちはいつもすべての多様な意見に、そして自分の考えを述べ、聞いてもらう権利に、最大限の敬意を払っています。ついこの前の私の家族との食後の団らんでは、社会保障制度や人口推移、あるいは正義についてのさまざまな倫理的判断に至るまで、多岐にわたる話題で盛り上がりました。もちろんこうした話題を論じる中で、議論は時に熱を帯びますが、しかし調和を乱すことも、人の話に喜んで積極的に耳を傾ける姿勢を忘れることはありません。こうした家族間の議論は、祖父母、両親、孫の三世代間でも行われ、この点が、私が何よりも重要だと思うことです。若者にあてがわれる役割は、受け身の聞き手ではなく、積極的に会話に参加して、革新的な視点や創造的な議論で相手を驚かせる―時に挑発する―会話の一員としての役割です。

私は現在、開発学の学位取得のため勉学していますが、規範的な次元の重要性を認識することを学びました。開発は常に「善きこと」や「望ましいこと」の判断を伴うものであり、従って、価値判断や、手段としてのみならず目的としての自由を認識することが求められます。同時に、結果として生じる評価は、あらゆる社会の文化マトリクス（文化創造基盤）を構成する一連の原則と価値観から成ります。

開発は、経済成長と同一ではないことは、今日広く認められているところです。GDPなどの変数を見ても、それぞれの社会が有益と考える開発プロセスを遂行するその能力や機会が明らかになるわけではありません。開発のための万能手段などないことから、多様性と多元性は開発の障害ではなく、それどころか社会が自らの運命を担うよう促す有効な手段と考えられるとの理解の下、文化は今日、今までになく開発問題への取り組みの中心に置かれるようになりました。

世界のさまざまな社会が大きな食卓を囲んで食後の団らんを楽しむ姿を思い描いてみてください。そうした食後の団らんは、それぞれの異なる立場が擁護され、すべての人の能力とその能力を発揮する権利とが認められるような、自由で率直なコミュニケーションの場となるものです。誠実で積極的な参加こそ開発の持続可能性を強化できることが十分に認識され、結果として協力と共感と兄弟愛が生まれる場となるでしょう。

そして世代間ギャップ、多様な意見、多元的意見は、家族の団らんと同じように、解決できない対立としてではなく、さまざまな能力の真の表現として、それぞれの社会が望ましいと考えることを選択する自由として、扱われるべきものです。開発を推進する上でさまざまな道をとるには、人間の権利を、防御の手段としてではなく行動の手段としてとらえることが必要です。自身のために他者の決断を阻むことよりも、社会が望むこと、社会が正しいと思うことを達成するために努力することが必要です。開発について議論するということは、自分たちの人生について決断を下し、文化特有の価値観と慣習に従い自らが望む人生を送る人々の手に開発を託すことです。そしてこの過程において、若者に求められるのは、未来について考えるだけでなく、未来を構築することです。今こそ率先して創造的な行動をとるべきときです。今日から未来を構築していかなければなりません。